

ただ黙ってそばにいる幸せ

江頭理恵
(幼稚園教諭)

小学校から幼稚園に転任してきて、三年目になります。小学校に長年勤めてきましたが、三年たってもまだ、毎日さまざまな思いと葛藤しながら幼児教育を学ぶ日々です。

三年前、私は年少児を担当することになりました。

本園では、登園してきた子どもたちは自由に遊び始めます。クラスで一緒に動くのは、基本的に帰りの時間だけです。これまで毎日、時間割を基に過ごしてきた私は、次の日の見通しがまったく立たず、不安になってしま

ました。

最初の日、「もも組さーん、お帰りの時間ですよ!!」と大きな声で呼ぶと、副園長に「呼んでも誰も来ないと思うんだけど……」と言われました。そういえば、みんなそれぞれに夢中になって遊んでいますし、他の先生方を見ると、大きな声で呼んだりされていません。「帰りの時間には集まるのが当たり前」と勝手に思っていた自分が恥ずかしくなりました。「どうすればいいのでしょうか?」と尋ねると、「一人一人声を掛けていくの。それと、お部屋で何か楽しいことがあるって思うと、集ま

江頭理恵(えがしらけえ)
佐賀大学教育学部附属幼稚園教諭。平成26年度に公立小学校より交流人事で異動。幼稚園教諭としてはまだ3年目です。

「つてきますよー」と言われました。その日、何にも用意していなかった私は、深く反省しながら、「お部屋に入ろうね」と声を掛けて回りましたが、どうしても入ってきません。何とか副担任の力を借りて子どもたちを保育室に集めました。かなりの時間がかかり、予定していた絵本を読む時間もなくなっていました。

その日から、とにかく保育室に集まると楽しいことがあると思ってもらうために、先生たちに教えてもらいながら、手遊びを覚えたり、ペープサートを準備したりしました。自分に子どもたちを引きつける何の技量もないことが情けなく、落ち込む日々でした。

それでも一週間ぐらいたつと、すっかり遊んで満足した子どもたちは、「今日は何の紙芝居があるの?」と、むしろ帰りの時間にみんなで何かすることを楽しみにして保育室に戻

ってくるようになりました。まだ生まれて三年余りしかたっていない子どもたちの自ら育つ力に、圧倒される思いでした。

ですが、保育室に集まってくるようにはなつたものの、どうもスムーズにいきません。

そのとき、「次から次に進めないと。間に時間が空くから、その間に子どもたちはバラバラになつてしまうのよ」と、また副園長に助言をもらいました。小学校は一斉で動くことが多いので、全員がそろうまで待つことが多いのです。待つことが大切だと、学んでもきました。無意識のうちに、子どもたちがそろうのを待っていて、その間に子どもたちの意識は途切れてしまつていたのです。

二年目には、そのまま子どもたちを持ち上がり、年中クラスを担任しました。年中になると、集団で遊ぶことも増えてきます。

ある日のこと、年長児に教えてもらって、「氷鬼」が始まりました。氷鬼といっても、タッチされても氷にならない子もいたり、鬼もたくさんいたり、緩いルールで始まりました。

そのうち、氷になった友達を助けるところがスリルがあつて面白いと気付いた子が「凍らないと、助けられないから面白くない!」と言いだし、「ずっと走ってたら疲れるから、バリアを張って、鬼が入れない場所をつくらう」とか「鬼も休む場所があるよ」と、自分たちで話し合つてルールをつくりだしたのです。クラスで微妙にルールが違つるので、年長児と氷鬼をする時は、「どつちのルールですか?」という話し合いから始まります。四、五歳の子どもたちが、こんな話し合いをすること自体、私にとっては衝撃でした。また、鬼ごっこは、まずジャンケンをして、鬼を決めて……と決めつけて、子どもたちの創造性

を摘んでいた自分に気付くことができました。

このように、幼稚園に赴任して今日まで、新たな発見の連続で、それは、これまでの長い教員生活を反省する日々でもありました。

本園の先生は、誰一人大きな声を出すでもなく、声を荒げるでもなく、子どもたちの思いに寄り添っています。保育者と子どもたちはある意味対等で、保育者が裁判官になることもありません。日々の保育の中で、子どもたちのつぶやきに耳を澄ませ、言葉にならない思いをくみ取り、自らの思いを返していく姿に、学ぶことが多いです。

もちろん、「教科」というものがあり、それぞれ目標がある小学校で、すべて同じようにはできないでしょう。しかし、私自身を振り返ってみると、大人の願いにはめ込む形で子どもたちの行為を評価的に見る「教育の働き」が過剰になつていたように思います。

子どもたちが見えない壁にぶつかっているときに、今までの私だったら、まず自分が何ができるかを考え、あれこれ尋ねたことでしょうか。もちろん、今でも必要なときは「どうしたの？」と尋ねることはありますが、ただ黙ってそばにいただけで、子どもたちは自ら考え、葛藤し、ふと顔を上げ、強い瞳を私に向け、「遊んでくるね」と駆けていくことがほとんどです。子どもたちには、自分で考え、乗り越えていく力があることを、改めて感じさせられる一瞬です。

小学校に勤めていたときは、黙ってそばにいたくても、その時間がありませんでした。授業の時間が迫ってくると、私自身が葛藤した末に、「後でお話聞きましょう」と謝ることも多かったのです。放課後、「あのときはどうしたの？」と尋ねても、「もういい!!」と心が離れていってしまったこともよくあり、申

し訳ない気持ちでいっぱいになっていました。でも、今は、ゆったりとした流れの中で保育をしているので、その時間が十分に保障されています。

時には、二人でブランコに揺られながら、時には手をつないで、ただただ黙って歩きながら……。

そんなことができる幸せ。そんな時間が保障されている幸せを今、感じています。それができる幼稚園は、なんて素敵なのところなのでしょう。

注 鯨岡峻『子どもの心の育ちをエピソードで描

く』ミネルヴァ書房 二〇一三年